
「卒業・・・ホワイトデー」

ころり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「卒業・・・ホワイトデー」

【Nコード】

N3512D

【作者名】

ころり

【あらすじ】

バレンタインデーに気になる女の子から貰うことができた主人公。3月14日・・・卒業を前日に控えた日。彼の運命の一日が動き出す。

あのとぎの一瞬の輝き。

「卒業・・・ホワイトデー」

時は2×××年3月14日、朝・・・俺の席。

俺は今までにないくらい今日という日に緊張しています。

まさか、ちょうど一ヶ月前に後輩の子からバレンタインデーということ

お菓子をもたらえたなんて・・・。

俺？すごくねえ？その子は前々から気になってってさあ・・・

やべえ、明日卒業式なのに・・・当日にあげる俺ってちょっと馬鹿っぽいけど。

でも、この日のために結構頑張った！！馬鹿な俺なりに！！！！
・・・ところで

あの子にあげるものとは・・・じゃじゃん！！ズバリ、俺の気持ち。

・・・ウソです。いや、ウソでもないけど。

とりあえず、コレ。まあ、コレを見て喜んでくれるとは思えないけど。

でも、コレとコレもつけるから許してくれるか？そして、おまけにコレをしよう。

そして今はとりあえず、あの子に会えるのを待ちましょう。

・・・一時間目 数学、少人数教室に移動して勉強・・・あの子に会えず。

・・・二時間目 国語。教室で授業・・・論外。

・・・三時間目 体育。（あのこのクラスが）・・・俺は、音楽・・・遠くで見ただけ。
先生に怒られた。理由はボーっとしてたことと、俺の制服に付いてるはずのものが無いから。

・・・四時間目 理科。自習、プリント終わらせ爆睡。

さあ、いよいよ、昼休み！・・・！

5分以内に弁当を食べて。いざ、あのこの教室へ！！！！・・・とはいかず。

情けないながらも、いつもあの子は三年のところまで来てくれるので、待機します。

・・・三年の廊下で。

「・・・い、おい！！！！シカトか！！！！お前！！！！」

「え？！　うわ！！なんだよ。なにか用？」

背後からいきなり友達に話しかけられ、不機嫌そうに答える。
だって、今日はめずらしくあの子が来るの遅いから・・・

「お前・・・機嫌わるう・トイレに誘おうと思ったに・・・」

「は？連れシヨン？」

「いまさらなんだよ。いつもの事だろうがよ！！！！」

・・・そうでした。

俺は、毎日昼休みになると午後の授業に備えてトイレに行く。

偶然にも、こいつと同じ時間ぐらいに行くから、なんとなく三年間友達の奴。

運命なのか、一度も同じクラスになったことはなかった。

だから、なんていうか、こいつとはトイレ仲間・・・みたいな、なんか変だけど。

しかし、俺のことは何でも知っていて、あの子のことが気になるって事まで全て

お見通しだった。

「ところでよお、あの階段の前で女子と話してるのって・・・お前の・・・」

「はあ？何処だよ。」

いままで、まったく見ようとしなかった女子の集団をよーく目を凝らしてみると

紛れもなく、あの子が楽しそうに笑っていた。

あのこの身長が高いので、今までまったく気が付かなかった。

・・・見事に紛れてんなあ。

「ちょうどいいじゃん、お前どうせお返しとかきっちり用意してんだろ？渡して来いよ」

「無理だよ。だって、女子だらけだろあそこ」

「ダーイジヨウぶだって、俺に任せろ！」

「何処に、そんな根拠が・・・」

俺の目の前には友の笑い顔ではなく、水色の紙袋。

「・・・あーそうですか、今年はそれはまあずいぶんとたくさん頂いたようで。」

こいつの自信はここからか、なんかムカツク。

ん？・・・待て俺！ムカツクんじゃない俺！

別にいいんだろうが俺は、好きな子にさえ貰えたら。よし、落ち着け。

「お前だって、結構モテるんだぜ？なのに、なんで断ってるんだよ！おかげで俺に回ってくるだろうが！」

「そんな、嬉しそうな顔で言うなよ、いやみにも聞こえん。まあ、良かったな俺のお下がりでも、しっかり、本命用のチョコがもらえて」

「・・・お前って奴は・・・」

「お前のそのニヤケ具合が、キモイから悪い」

「ま・・・ま・・・まあ、今からは、他人の嫌味考えるよりその左ポケットに入ったお礼をどうやったら上手く渡せるか考えるよ！俺は先にいく！」

そういつて、あいつは急に走り去っていった・・・じゃねえ！！俺も行かねえと！

トイレ友達のおかげであの子の周りにいた女子は居なくなりあの子は孤立している！！有り難う、今度からお前のこと、ふつうに友達って呼ぶよ。

「あ、はぁ・・・はぁ、あのお」

「あ！先輩、こんにちは・・・きつそうですね」

「まあ、ちょ、チヨイ待ち・・・・・・・・すう・・・・はぁぁぁ
あぁあ」

おれは、あのこの前まで来ると大きく深呼吸した。

幸い、別のところに群がった女子のおかげで俺達は階段の上から以外は誰にも見られないようになっていた。

「ふう〜〜〜」

「せ、先輩大丈夫ですか？」

「え？！あ、まあうん、ダイジョウブです」

やばい、急に緊張してきた。

「あのお、先輩」

「・・・ん？」

「私の前まで来たって事は、何か用事があったのでは？」

「あ、そうだ！・・・ちよつと、生徒手帳貸してくれない？」

「え？！それは・・・」

「え?!だめなの・・・」
「いや、いいですけど・・・」

彼女は一回あごに手を当てて、考え「ちょっと待っててください」といつて

俺に背を向けた。どうやら、生徒手帳になにかしているようだ。ちよつと経ってからくると俺の方を向き「ハイ!先輩!」と笑顔で生徒手帳を渡してくれた。

「あ!また向こう向いてくれる?」
「え?・・・はい」

彼女は不思議そうにまた俺につ背を向けた。
俺は、急いで胸ポケットからボールペンを取り出し。
生徒手帳のアドレスを書くところに自分の携帯のメアドと電話番号など

一通りのプロフィールを書いた。

「はい、いいよこつち向いて」

そう言つと、さつきとは別に少し不安そうにこっちを向いた。

「これ、どうぞ」

「え???なに???」

すこし、困惑している彼女にフツと笑みがこぼれた。イカン、イカン。

「あ、後で中身をよく見てみ!!それより、次はコレ、あげる」

俺は、おもむろに左ポケットに手を突っ込み、プレゼントを握り締め彼女の前に
ゆっくりと突き出した。

彼女は頭の上に「?」をたくさん浮かべながら俺の方を一回見て、
そつと手を差し出した。

おれは、小さく広げられた彼女の手の上に優しくそれをおいた。

「これって・・・第二ボタンと先輩の・・・名札?」

「そう、そう、その全ては俺の気持ちで出来ていますってね・・・

・君にあげるよ」

そついつて笑うと、彼女は恥ずかしそうに顔をうつむかせて隠してしまつた。

「・・・りがとう、ざいます」

彼女の掌にしっかりと包まれた俺の気持ち。

まあ、明日でいなくなるけど、君の心の中には残っておいて欲しいから。

俺は彼女の方に背を向けて、教室に帰ろうと思つたけど、ひとつ言い忘れたことがあつてその場に立ち止まつた。

「あ！そつだ、返事は・・・さあ
「はい？」

「返事は、生徒手帳を読んだ後にしてね　じゃあ、また」

「あ、あ、あの、先輩！！！」

「ん？何？返事以外なら聞きますよ？後輩？」

「コレ、お返しですよ？本当にありがとうございます」

「・・・おう」

多分、いま、あの子は笑顔なんだろう。向きたいけど、変だなあ視界がぼやけてるや。

こんな状態であのこの方を向いても、良く見えないから、意味ねえかな。

情けない、コレって涙の所為かよ。なんで、俺、泣いてるんだろう？心配しなくても、喜んでくれたし、これでやっと、卒業できるな俺。袖で涙を拭いて、走って帰った。

走り際に女子に囲まれた友を捕まえて・・・

）end（

（後書き）

この短編は去年に執筆したブログの短編を多少修正したものです。
楽しく、切なくをイメージしてみました
この気持ちが伝わってくれと幸いです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3512d/>

「卒業・・・ホワイトデー」

2010年10月28日08時30分発行